

## 大人とはどういうものか

11 月に 3 回にわたって、興部 130 年『興部町百年史』を読む会・平成 30 年度成人大学講座で、お話しをする機会に恵まれました。幸いなことに興部町には『興部町百年史』という今から 25 年前に完成した立派な町史があります。その一部を紹介する企画でした。

『興部町百年史』には、入植した当初の開拓苦労談を聞き取りし、記録している部分があります。その中に、明治 33 年に当時 13 歳で興部町に入植した、穴田鷹次郎さんの記録がありました。

生まれ故郷の富山県を後にして、渡道、石狩国長沼に移り、小樽から紋別までは船、そこから興部までは徒歩で…当時 13 歳だった私は、道らしい道もない深い森をかき分け、くぐり抜けやっとの事で父の所につきました。…仕事といえば、伐木焼き、草刈り、マド鋤振っての開墾地耕し。ブリキに釘で穴を空けたオロシがねでおろして作った馬鈴薯の芋すりだんごが常食…

興部町に最初に入植者として移住したのが、明治 31 年 5 月に石川県から米田久三郎・元角仁松の 2 家族と小作 1 戸です。その後 9 月に富山県から多田三次郎と小作の一行が入植、現在の北興地区に、同じく富山県から塚井常右衛門を団体長として中沢宅次郎・穴田三右衛門らが入地しました。その穴田三右衛門に遅れること 3 年、尋常小学校 4 年を終えて（当時義務教育は 4 年）3 年、13 歳になった穴田鷹次郎少年は、長沼まで母や弟たちといっしょに、そこからは単身興部まで来ることになるのです。

当時、鉄道は小樽・札幌・旭川までしかなく、移動手段は圧倒的に船でした。たぶん富山から小樽（小樽・長沼は途中汽車の他は馬車か徒歩か？）・稚内・紋別・興部と来たのでしょう。現在でも舞鶴（京都府）・小樽間のフェリーは 20 時間かかります。当時は、富山の伏木港から、小さな船なら途中の港で石炭なども積まなければならないかと思えば、2 日以上はかかるでしょう。小樽から稚内まで丸 1 日、さらに紋別まで丸 1 日、そして紋別から興部まで 4 時間程歩いてきたと想像されます。父親が興部に入植しているというのを頼みに、様々な人の援助を受けて、13 歳といえば中学校 1 年生ほどの少年が一人で興部まで来、そして、父と 2 人開墾作業にいそしむ。

生徒の皆さんも、保護者の皆さんもその少年の思い、想像がつくでしょうか。移住するにはそれなりの、必死にならなければならない事情があったのかも知れません。しかし、少年でありながら、自らの運命に不平をいうでもなく、自力で生活を切り拓いていこうと必死に開墾をしていった姿を思う度に、大人になるってどういうことだろうかと考えてしまうのです。この 13 歳の少年は、まともに学校なんかなかった時代なのに、（もしかしてだからこそ？）立派な大人として成長したと思えるのです。